

武の足跡シリーズ⑮

文・竹内海四郎

古流総合武術の香取神道流・大竹利典

古い武術であるほど総合武術の色彩が強い。あたりまえだ。実戦用の武術は、殺るか殺られるかが、その技の体系を成立させる前提だった。闇夜で襲われれば居合術で相手をし、剣を抜けば剣術を使う。棒があれば棒術だ。槍、薙刀、小太刀、両刀などなんでも扱えねば、戦場で生きていけなかったのだ。もちろん、柔とよばれる柔術もそろっている。

真剣刀法を伝 香取神道流

受けついだ遺産

武張らない。肩も丸みをおびている。温厚篤実なおやじさんの表情そのもの。しかし、身長163センチメートル、体重63

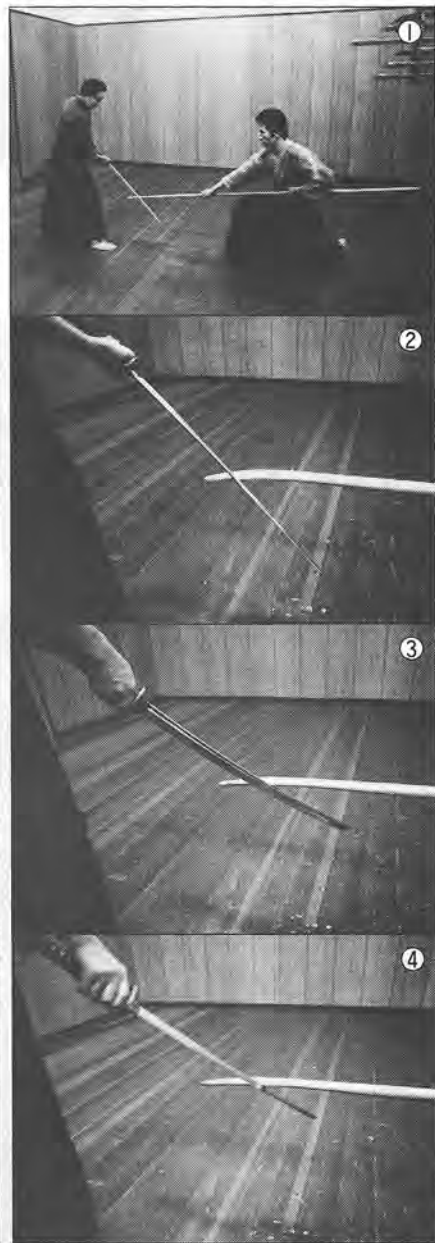
キログラムの五体には、日本の代表的な伝統剣術の継承者としてのシワがきざみこまれている。

一九二六年三月（大正15）大竹利典さんは、千葉県香取郡大柴町に生まれる。家は牧場を経営し、サラブレッドなどを



大竹利典師範

はしかかるの技



神武館道場(手前)

育てていた。馬と遊びながらはぐくまれた。5歳のころから馬に乗れるようになる。ハダカ馬にコサック兵のようにたわむれたりもした。そのおかげで、立ち乗り、横乗りなどの曲乗りもできる。

大竹少年は、昭和の戦雲立ちのぼる時代に成長する。三十一年(昭和6)の満州事変以来日本は十五年戦争に突入した。

16歳になったとき、血判を押して香取神道流に入門する。当時は戦場で死ぬというのが、あたりまえと思わせる教育で

あった。

「よくよく考えてみると人間は死ぬとき、笑って死ぬのだろうか、と疑問をいだいたんです。それで何も修業しないで、そんな心境になれないと思ったんです……。

香取地方には、古い武術があることを知っていました……。それで4キロ離れた師匠の家まで歩いてかよったんです。両親が稽古に行けよと、協力してくれませんでした。牧場での仕事を早くきりあげて、さきに風呂に入れてもらって……。いま子

供を教えています。家族の協力がなければ習えませんが……」

稽古は、旧暦の十月二十日(新暦十二月)の恵比寿講の日から三月の彼岸まで、毎晩つづいた。それ以外の期間は一人稽古を積み重ねた。林弥左衛門師範の家が農家だったために、四月から十一月までは農作業にあてられていたのだ。

当時の稽古は、居合術が師範宅の居間で、剣術は戸外の月明りやロウソクの灯のもとでおこなわれた。冬、霜柱の立つ

地面を素足で踏みしめているうちに、身体があたたまる。そして、稽古の行き帰りに道路わきの竹などを斬りながら歩いた。このため、途中の道路のそばには竹が一本もなくなったという。

四五年六月(昭和20)、応召されて入隊する。八月十五日に敗戦をむかえたため、その直後、帰郷することができた。

一生懸命に稽古しているうちにどんな責任を持たされるようになる。すでに29歳から師匠のかわりに指導をまかされるようになっていた。

五九年に、無形文化財の申請をだす。このとき、神奈川県に住んでいた剣術の師範が香取神道流の宗家だと名乗っていることがわかった。大竹さんは、木刀を持って討ちにいってきま、と師匠に許可をもらいにゆく。

「そんなことするもんじゃやない、捨てておけよ」といわれてやめたそう。

このようなことがあるので、無形文化財の指定の際には、千葉県香取地方に伝わる香取神道流という条件がついた。

一九六〇年四月(昭和35)、日本の伝統武術では、最初に県の無形文化財の指定をうけた。そのときの保持者は、宗家飯篠快貞氏、林弥左衛門師範、大竹利典さんの3名だった。

「無形文化財の指定を申請したとき、県庁の課長で剣道五段の人が、香取神道流ってなんだ、武術なら、強いか弱いか試合をさせるといつてきたのです。こちらは試合を禁じられていました。ふつうの木刀で急所を打つては死んでしましますし……。こんなことだったら申請を却下しようかという話もたののですが、もし試合をやるのだったら、アンタにたのむ

と師匠にいわれました。

それで、タバコの煙が抜けるような木で軽い木刀を作り、一打ちで決める技ばかり2ヵ月間、每晚稽古しました……」

稽古は内緒でやっていて、ところが突然、その試合が中止になってしまふ。相手が放棄してきた。そのうえ、文化財の指定ももうけることができた。

師匠はこれが香取神道流の極意だ、と聞いて喜んだ。勝つても負けても勝負は怨みが残る。戦わずして勝てたなら、それが最高ということなのだろう。

35歳になり、師匠からアಂತに極意をやらうといわれる。けれども香取神道流は、42歳にならないと極意皆伝をさずけることができない。極意総伝としてうけた。しかし、巻きものには極意皆伝となっていた。

六四年、林弥左衛門師範が亡くなる。享年82歳だった。あとをまかされ、大竹さんは血判をとって門弟をとりはじめた。このころ、武術・武道の研究で著名なドン・ドレーガー氏が入門した。彼は極東地域の情報将校だったそうだが、その人柄は一般の日本人よりも、はるかに伝統的な日本人に近いと定評があった。

たとえば、道場で若い弟子が木刀をまたいだことがあった。それを見たドレーガーが高弟に告げる。『ぼくは彼よりも先輩であるが、外国人だから気を悪くするといけない。あなたから注意してください』と……。

木剣を投げたり、またいではいけない。これは稽古人の心得である。

また、七四年に成田空港建設のため牧場を移転したとき、ドレーガーは大竹さんに、これを機会に香取神道流の指導に

専念してくれるように進言している。これ以来3年間、真言密教と古武術との関係を勉強したという。

一九八二年五月、ドレーガー氏は治療のためハワイに帰る。その5ヵ月後、ガンを患った。

死後2時間したら、もう大竹さんの宅へ連絡が入った。この知らせを電話でうけたときはなんでもなかった。部屋に入り、一人になった瞬間、なぜか涙があふれて泣けてしやうがなかったそう。

この流派はヨーロッパやアメリカでもよく知られている。ドレーガー氏の武術・武道に関する著作の影響もある。現在でも、道場での彼の名札はそのままになっている。

真剣刀法

日本刀の技法は、斬る技にその特徴がみうけられる。

中国の刀は片刃で反りがあり、身はばが少し広い。円を描く刀法で、刀身の重

さで叩き斬ることにむく。剣は両刃で直刀である。突いたりそぐように斬るのが得意だ。

剣道のシナイは日本刀の延長であるが、反り、鑢、棟がない。剣の代用品として、木剣が限度であろう。

日本刀は手前に引いて斬る技法が高度に発達している。これは農耕民族としての日本人の筋肉の使い方と関係している。クワやスキを扱うときは同じように手前に引く。

「日本の武術は剣が主体です。武器が手の延長として考えなければ……。とくに剣術は武器の特徴を知ることが基本です。足のむきとか運びは、稽古しておれば自然とバランスよくなってきます。飛びこむときにはどのようにしたら速くできるかなどもやっているうちに会得できてきます。それよりも刀を知ることが大事なんです。その例として、何千本の刀をみても鑢にキズのあるものはないです。すぐ折れてしまいます。だけど棟にキズのある刀はいっぱい見えてきました。焼き

の入った刃とちがつて棟は叩けば弱い。でもはじくだけでしたら力を上へ流してしまうので、折れることはありません……」

日本刀の真剣技法の特徴は、刀の形を最大限まで活用した点にある。

①中国の細身の剣と、反りのある片刃の刀との長所をかねあわせ、斬る突くの両方の機能をあわせもつ。

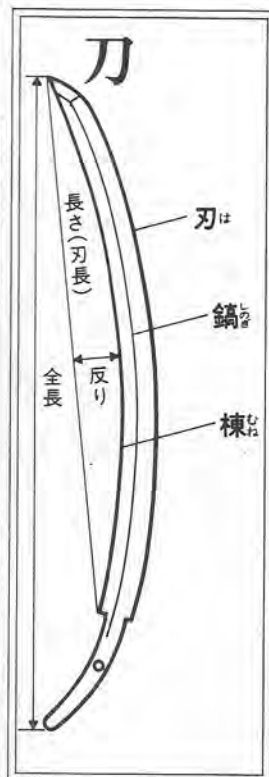
②細身の刀に反りをつけることにより、斬ることにむく焼きの入った硬い刃と、衝撃を吸収する弾力のある軟らかい棟とを合体させた。それによって、手前に引いて斬るときに力に耐えることができるようになった。直刀で両刃の中国剣の場合、刀身すべてに焼きを入れてハガネのように硬くするか、まだら状の焼ムラをつくることによつて折れにくくしているようだ。

③細身の刀に反りをつけたので、刃の反り、棟の反り、鑢の反りを生かして斬ったり突いたりする技法をみだせた。この反りは、相手の刀剣と斬り結んで交又したときに、その威力をだせる。

槍 術



◀ 刀の反りを使う



剣術の表技は、遠い間合からエイ、ヤアーと斬り結んだり、一太刀のもとに斬り捨てたりする動作がほとんどだ。映画・テレビの殺陣で見るとな光景そのままのアクションの世界――。

けれども、裏技は斬り結んで相手の刀剣と交叉した瞬間の技が多い。たとえば、斬り結んだとき、刃と鑓と棟を使つて、相手の剣にくわえられている力の接点を連続してずらす。相手の力をはずした瞬間、喉に斬りつける。

中国拳法の交叉法のずれこみ技法と共通した使い方だ。この他にも、剣と剣が交叉した接点を、テコの支点にして、刀の柄頭で当て身を入れる技もある。もちろん巻き技や流し技などもある。

日本刀という道具を使うことにより、

交叉法の技法がより純粋な形で現われてきているようだ。

とくに、「はしかかる」という技は素晴らしい。斬り結んだ瞬間に使う技法としては、最高水準の一つであろう。交叉した接点を、刃と鑓と棟を使ってラセン形にねじりこむ。これによって、力の接点を連続して微妙にはずされた相手の剣は、力の方向がくずれてしまう。もう自在に斬りつけばよい。

この技法は、手首を握られたときや、拳法の交叉法としても応用できる。

「香取神道流の稽古の型は、相手が死んだ、次はこちらが死んだ、また相手が死んだ、さらにこちらが死んだ、という技の組み合わせなんです。それを道場の節穴からのぞかれても、なにをやっている

かわからないように作りあげたのが、公表されている型なんです。これをくずして裏の型でやると、相手の頸動脈を斬ったり、自分の肩間を突かれたり、というように交互に殺し合うことを仮想した型になるのです……」

古流剣術の稽古は、ややもすれば、型の完成がその武術の到達点と錯覚されやすい。これは古武術の課題なのかも知れない。表の型だけだと、チャンバラっこに見られがちである。だが、昔の実戦としての真剣技法が巧妙に隠されている流派もある。自分の眼で発見したいものだ……。

武張らない

兵法とは平法なり、という言葉がこの流派の基本的な考え方である。兵法は、

当時の自然科学であった天地自然の運行ののつとつて、体系づけられていた。これを戦いの道具にしないで、人間として穏やかな一生を送るべきだ、との考えなのである。

そのためか、この道場では武張った稽古人を見かけない。頭髪を首までたらし、鹿皮のハオリを着たりして、世間から変人扱いされる人がでることを避けている。



門弟との礼

骨董品でない伝統武術の保存とその伝承に使命感をもっているためか、稽古中の雰囲気さわやかだ。

「私が勝手に宗家を名乗ったり、習得したものを我流で勝手に型を変えたら、それは大竹流になってしまいます……。いまでも伝書通りの型になっています。もし私が大竹流を名乗れば、今度は弟子が自分流を名乗りはじめます。これで流派が乱れるのが一番恐い。入門の際には女子でも血判をとり、少数精鋭主義で教えています。それと、お金を取るとやっぱ汚れてしまいがちなので取っていません……」

大竹師範は、現在伝えられている技の体系を完成されたものと考え、それを正確に保存して伝承しようという心がけている。また、たんなる郷土芸能のような文化財でなく、武術を使えるものとして教えている。

ところで、この香取神道流を習っている門弟たちは、どのような感想をいっているのだろうか。

「以前、柔道や柔術をやったことがありました。田舎が鹿島だったので、いま完全な形で技が残っていないため香取神道流を習いました。中国ではいろんな武術が生まれて消えていきました。うちの流派は約六百年間もつづいています。香取の土地とともに発達してきた我々の文化遺産を大切にしたいのです……」

〔椎木宗道さん、45歳。香取歴10年。公務員〕

「コンピューター関係の仕事なので、夜たたき起こされたりもしていました。習う機会がなかったのです。現在、本来の人間から離れていく時代の中で、人間的

か とり しん どう りゅう
香取神道流

正式には、天真正伝香取神道流という。流祖は飯篠長威斎と伝えられる。香取・鹿島は武術の老舗である。技が体系づけられるまでは、香取の剣、鹿島の剣と地域名称で呼ばれていた。

飯篠家は道統を継承して現在、香取神道流の宗家は飯篠修理亮快貞氏で20代をむかえている。

この流派は古流の総合武術で、相当の部分が公表されている。①居合術(表居合6ヶ条、立合抜刀術6ヶ条)。②棒術(表6ヶ条)。③太刀術<剣術>(表之太刀4ヶ条、表之太刀崩し、◎五行之太刀5ヶ条、◎五行之太刀崩し、◎両刀4ヶ条、◎極意小太刀3ヶ条。)④薙刀術4ヶ条。⑤鎗術6ヶ条。

これ以外にも柔、忍術、軍配兵法(兵団の配置や進撃退却の指揮法)、築城法、方位、陰陽学などが残されている。

忍術は訓練法でなく、忍を破る心得として、忍法の知識が伝えられているようだ。

また、大竹利典源健之師範は、武術と真言密教との関係に詳しい。

「劍禪一如とよくいわれますが、昔の武将たちは禪でなく、密教を信じていたのです。たとえば、国宝級・重文級の刀剣は故事来歴がはっきりしています。一般の無銘刀なども含めて、それらの刀の刀身彫りの95%が密教なんです……。刀身彫りは装飾的なものじゃなく、信仰からきているのです……」

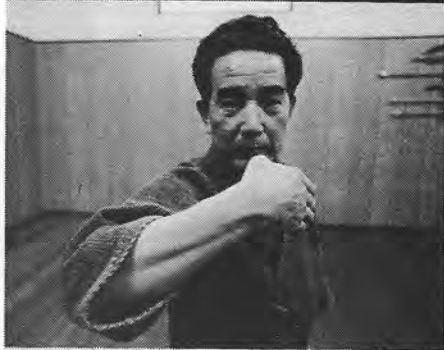
この流派の各刀法には、まだ珍しいものが残っている。薙刀なども女子用でなく、男子の操法がある。

☆参考資料

『香取神道流』(大竹利典著、全3巻、港リサーチ刊)、『武芸流派大事典』(綿谷雪、山田忠史編、東京コビイ出版部刊/新人物往来社刊)



大竹利典氏



▲柔の掌当て

大竹師範の掌当て

なことをやりたいと思ひまして……。やるならば本物と思ひ、いろんな流派を見てから決まりました……」(中村享さん、44歳。香取歴4年。コンピュータの技術者)

「父(大竹師範)が稽古していたのを、子供のころから見ていました。門前の小僧だったので、型や技がなんとなくわかっていました。香取神道流は約六百年も前につくられたものなのに、普通じゃ考えられない大きな体系をもった武術で、現代社会のものであてはめても通用するところが多い……。初めて習う人でも苦にならない技術体系になっているのに、

修業していくにつれてドンドン難しくなります。稽古にはげむほど、完成された武術だという気が強くなります……」(京増重利さん、29歳。香取歴17年。会社員)

人類を幾度も死滅させられるほどの核ミサイルの剣の下で、我々は生活している。

現代社会の暮らしの中で、武術という東洋的な身体の方法論は、どんな意味をもちうるのだろうか。飢えたる者、飽食してダイエットする者がマンダラのように存在する同時代史の渦の中でも、武術には捨てがたい生命力の輝きがあるのだが……。